

湖国で輝く 企業を 訪ねて



「用」と「美」と「技」が 集約した新しいかたち

木桶の製法は今からおよそ700年前に大陸から伝えられ、江戸時代に入ると生産技術の向上によって各地に普及しました。水や水分を含んだものを扱う時のもっともポピュラーな器として、人々の暮らしになくてはならないものとなり、食品などの製造や保存・運搬にも大きな影響を与えました。

伝統的な桶指物おけさしものの製作技法を用いて木製品を製作する中川木工芸は、初代中川亀一氏が京都白川に工房を開いたのが始まりで、現在は二代目中川清司氏が京都工房、三代目中川周士氏が滋賀にある工房を主宰しています。清司氏は平成13年に重要無形文化財保持者の認定を受けています。

美大で立体造形やコンテンポラリーアートを学んだ周士氏は、父清司氏の下で、桶職人としてのキャリアをスタートし、平成15年に独立して、当時の志賀町に移り住んで工房を構えました。

かつてはどここの家庭にもあった木製のおひつや桶も、安価なプラスチック製品などが普及して、日々の暮らしの中で目にするものがほとんどなくなりました。



優れたものづくり文化を 滋賀から世界へ

□ 中川木工芸 比良工房 □



工房／滋賀県大津市八屋戸419
設立／平成15年6月
事業内容／木桶の制作・販売
URL／<http://www.nakagawa-mokkougei.com/>

木桶職人

中川 周士氏



「祖父の頃には京都に250軒ほどあった桶屋さんが数軒に激減。このままでは、桶を作る技術は絶え、桶を使う文化がなくなってしまう」という危機感を覚えて、今までにない桶を作ろうと決意します。

そんな時に、京都の企画会社のプロデューサーと出会い、新しいデザインを求めて2年間試行錯誤を繰り返した末、口縁の両端がシャープに尖った画期的な桶が完成しました。

伝統的な桶は口縁が正円で、急な楕円のカーブを作るのは工法上極めて難しいとされています。角を鋭くすると桶をとめる箍が掛かりにくいので、箍が入るところは丸いカーブを残し、口縁の部分だけ鋭くしたことで、「用」と「美」と「技」が一つに集約した完成度の高いデザインが生まれま

した。口縁が木の葉のような形になったことから「Konoha」と名付けられたこの製品は、ドン・パリーニョンの公式シャンパンクーラーに選ばれたこともあって話題となり、次々と注文が舞い込むようになり

ました。現在、注文後、半年から1年待たないと手に入らないほどになっています。

技術とデザインの融合について 海外でも高い評価を受ける

シャンパンクーラーの製作を通じて、伝統技術だけでなく、デザインも大切であると考えようになった周士氏は、デザイナーとコラボした作品などを積極的に手がけるようになります。平成25年にはパリで作品を発表、その後、ヨーロッパやアメリカで開かれる展示会にもスツールやフラワーベース、オブジェなどを出展するようになり、高い評価を得るようになりました。

また、イタリア人のデザイナーグループと、日本の職人集団のコラボレーションによる新ブランド「Hands on Design」をミラノに立ち上げることに協力し、次々と新作を発表しています。

海外では工芸品としてではなく、アートとして評価されることが多いそうですが、「アートとデザインとクラフトの距離は年々縮まってきて、一つになろうとしている」といわれるように、暮らしの中にある工芸品にも、アートやデザインの要素が求められるようになってきました。

桶を日常の暮らしに戻すのが周士氏の最終目標ですが、昔のようにすべての家庭に桶を普及させることではなく、新しい製品を提案し

て、その機能やデザインを高く評価してくれる人の間に広がっていくことを目指しています。

大量生産品に比べると遥かに高価になりますが、新しいマーケットを創造することで、その価値に見合った価格も新たに提案しているはず。

今の時代に合ったやり方で 伝統技術を後世に伝える

9月に大津市八屋戸にオープンした新しい工房は、かつては藍染めの工房として使われていた建物を活用したものです。「銀行と信用保証協会による資金面での援助を受けて、未来に向けて新しい一歩を踏み出すことができました」と、笑顔で語られた周士氏。

桶職人を目指す若者やスタッフが、快適に仕事ができる広い工房のほか、ギャラリーを併設、インターンシップの学生や海外から訪れるクリエイターが滞在できるスペースも設けられています。

桶指物の技術を後世に残すために、100年先を見据えた活動を行っていききたいという周士氏。そのためには人を育てていくことが不可欠になります。

美大で行う桶づくりの講義の中で、古くさい伝統工芸品を作る仕事も、例えば外国の人の目から見るとクリエイティブな仕事に見えるということを伝えると、授業を受けた学生の何人かが、毎年、実際に学外実習で工房にやって来て、桶づくりを体験しています。

祖父亀一氏は10歳で桶職人の家に住み込んで「丁稚」として修業して技術を身につけましたが、周士氏は今の時代に合った職人の育成システムを工夫したいと考えています。

また、地元滋賀でさまざまなものづくりを行っている職人や作家に呼びかけて、海外で作品を発表するチャンスを作り、優れたものづくり文化を世界に発信することで、滋賀の活性化につなげていきたいと、今後の展望について力強く語っていただきました。



「Kotori」と名付けられたヒノキ製のおしゃれな水差し

企業ポリシー

- 桶指物の製作技法を後世に伝える
- 新しいデザインと伝統技術の融合に取り組む
- 日本のものづくり文化を海外に発信する

Message

新しい試みを繰り返しながら伝統の技を磨く

海外で作品を発表するようになってからは、現代美術と木工芸を融合したようなものづくりにシフトしました。伝統と最先端は決して相容れないものではなく、むしろ伝統を守っていくために、新しい試みが必要ではないかと感じています。

一方だけでなく、いろいろな側面から見ることによって、ものごとの本質が見えてくると思います。実は、多方向から見ることは日本人が得意とするところで、多様な価値観を認め合い、異なる文化や新しいものを柔軟に受け入れる日本人の感性やものづくりに対する考え方を、作品を通して文化として世界に広げていけたらと思っています。

